

# 『未来のために学ぼう立山』

～町民の町民による町民のための改革～

跡見学園女子大学

観光コミュニティ学部 観光デザイン学科

村上ゼミ 2年

# 目次

## 1. はじめに

## 2. 現状分析

## 3. 立山観光大学の開設

- ・ 提案理由
- ・ プラン概要
- ・ メリット・効果
- ・ 具体案
- ・ 成功例

## 4. 町民の 町民による 町民のための

## インタービレッジ コンペティション

- ・ 提案理由
- ・ プラン概要
- ・ メリット・効果
- ・ 具体案

## 5. おわりに

## 1、はじめに

私たち跡見学園女子大学村上ゼミ2年の13名は、9月24日から26日の3日間、フィールドワークのため立山町を訪れた。

その際に感じたのは町民が町の魅力を語れないということだ。

立山町には世界中から観光客が訪れる、立山黒部アルペンルートをはじめとする非常に興味深い観光資源が多くある。それらにより年間に100万人の観光客を集めていることは紛れもない事実だ。また、趣のある五百石駅や大きな公園など情緒溢れる立山町の魅力も点在している。しかし、町民の方に立山町の魅力を伺うと、「若者は郊外へ行ってしまおう」「年寄りばかり」「交流の場がない」という魅力とは程遠い意見を多く耳にした。

地域活性化で重要であるのは地域住民の意識・やる気だと考える。立山町インターカレッジコンペティションは『地域内だけでは解決できない課題を、大学・学生の持つ専門的知識やアイデアで解決し地域活性化を図ること』を企画趣旨としている。私たち観光を学ぶ学生として企画趣旨にもある通り『大学・学生には立山町という生きた学びの場を提供し、実証実験することで、提案内容の実効性を考察できる機会を作ること』ということはとても光栄なことでもあり、チャンスでもある。だが、外部や町がどんなにやる気があっても地域活性をすることはできないと考える。平成20年度の関東ICT推進NPO連絡協議会の魅力あるまちづくり事例集によると、活性化ポイントはいろいろあるが「地域の人が地域のことや地域の魅力を知らない・感じていない、そこに基本的な問題がある。」と書かれている。まずは地域住民が町を知り、魅力を発見し意識を高めることが重要であるのではないだろうか。

そこで私たちはコンペティションの企画趣旨である「持続可能な活力づくり」のテーマをもとに、『立山観光大学』を提案する。

持続可能な活力のためには、まず町民が地元の魅力に気づき、町中から元気になるとだと私たちは考えた。

この提案は、町民一人ひとりが立山町の魅力を再認識し、知識を深め、交流を広げることで町全体の意識改革を第一段階としている。そして最終的には、町民自らが自分たちの町を元気にしていけるような仕組みづくりを目標としたものである。

## 2. 現状分析

私たちがフィールドワークで立山町に足を運んだ際、町民の方々に実際に魅力を伺っても「若者は郊外へ行ってしまう」「年寄りばかり」「交流の場がない」という魅力とは掛け離れたマイナスな意見が多かった。また、私たちが「もっと観光客に来てほしいですか?」「立山町を活性化させたいですか?」と伺っても、町民の方々は「今のままでいい」という控えめな意見が多かった。立山町を今以上に活性化していくためには町の人が地域のことや地域の魅力を知り・感じていなければならない。しかし、町民の方々の現状は自分たちの地元の魅力を語ることができず、立山町の活性化にも消極的である。

今後の立山町は、世界有数のシャンパン製造会社で有名ブランドの醸造最高責任者を務めたリシャール・ジェフロワ氏が立山町を拠点に世界を魅了する酒造りに挑むことにより、今以上に注目を浴びることが予想される。また2012年から始まり、今年で7回目となる立山町インターカレッジコンペティションによって得た、大学・学生の持つ専門的知識やアイデアを活かし立山町はさらに魅力ある場所へと変わっていくだろう。

私たちはまた、立山町のフィールドワークの際に町長室と商工観光課を訪問し、貴重なお話を伺った。町長や商工観光課の方々は「もっと若者に来てほしい」「県外、そして国外からも多くの観光客を呼び寄せたい」「移住者を増やしたい」という意見で、立山町の活性化に力を入れていることがわかった。

町民の方々、そして町長や商工観光課の双方の意見を伺い、私たちが感じたのは、町民側と町長や商工観光課の方々など行政側との温度差である。現状のままでは外部から観光客を呼び込むことは不可能なのではないか。私たちは、実際にまちなかファームやグリーンパーク吉峰などを訪れ、その魅力を知り今後の町づくりにも活かしていけるのではないかと感じた。しかし、それ以前の問題で、まずは町民の方々の意識改革が必要不可欠であると考えた。「今のままでいい」という意見は、立山町に長い間住んでいるからこそ、その土地の魅力や良さを知らない、または、外部から見た魅力が当たり前のものであると思ってしまうのが原因であるのではないだろうか。

私たちは、立山町の魅力の発見・再認識をしていくことで町民の方々の「今のままでいい」という意見が自然と「観光客に来てほしい」のような、立山町の活性化に前向きな意見に変わると確信している。

### 3、提案①立山観光大学の開設

立山の過去・現在・未来を学ぶことで、町民の立山町に対する意識改革につなげる。

#### 《提案理由》

私たちが実際に立山町を訪れた際、町民の多くが自分の町の魅力を語れない、また気づいていないと感じた。この課題から私たちは、立山町の歴史や観光を学べ、かつ体験もできる学校のようなものを開設してみたらどうかと考えた。

現在、立山町にはたてやま町民カレッジが存在している。しかし、私たちが提案する立山観光大学は、観光に特化したカリキュラムを作り、立山町の過去・現在・未来を知ることができる内容となっている。この大学の入学することで、町民全体が立山町をより深く知り、町に対する意識が変わるのではないかと考える。

#### 《プラン概要》

町民が自らの町に誇りを持ってもらうために、「立山観光大学」の開設をする。学生は主に立山町の町民の方々である。この「立山観光大学」では、立山の観光に特化した様々な講義を展開する。大学に見立てたシステム作りをすることで、住民同士の交流の場にもなり、一貫した講義に参加することができる。

講義のコンセプトは、立山町の観光の「過去、現在、未来」である。有名な観光地としての歴史、そして現在の立山に関する観光の状況、さらには町長が立山をよりよくしていくために計画している観光政策を講義形式で町民の方々に伝えていくことで、立山のこれからの観光について町民が学んでいける場、そしてこれからの考えてゆくきっかけを創り出す。

また、講義によってはゲストスピーカーを招く、座学だけでなく体験型の講座も取り入れることで、楽しみながら立山について住民が学べる機会になるであろうと考える。

## 《メリット・効果》

### ① 町長と町民の距離が縮まる。

→町長が直接、町民に自分がやりたいこと、自分自身で描いている立山町の未来などを伝えることで、町民とより近くで意思疎通ができると考えられる。また、生の町民の声を聞くことができるため、より良い町づくりができるだろう。

### ② 町の良さや魅力の再認識ができる。

→自分が住んでいる地域の歴史を学ぶことで、知らなかったことはもちろん、知っていたことはさらに深く知ることができ、魅力を再認識することができる。

### ③ 交流の場になる。

→町民同士が立山町を学ぶことで、年齢に関わらず様々な世代で交流することができる。また、座学だけでなく体験授業もあることから、定期的に体を動かし外に出ることで、健康的な生活を送れる。

### ④ 地元に誇りを持つことができる

→自分が住む町を学び・知ることで、今まで以上に立山町を好きになることができる。そして、自分の得た知識を観光客や県外へと広めることで立山町の活性化にも繋がり、地元に誇りを持つ事ができる。

## 《具体案》

「立山観光大学」で立山の観光の「過去、現在、未来」をテーマにした講義を展開する。具体的な講義内容に関しては以下のようなものである。なお、講義は年間を通じて行われる一連のプログラムである。

以下が講義のテーマの一例である。

### 〈例〉

テーマ	内容	目的	具体例
過去	現在に至るまでの観光の歴史について	過去に行われてきた政策や、変遷を学ぶことで誇りをもってもらおう。	・立山の山岳宗教の歴史 ・これまでの観光政策
現在	今行なっている観光政策と現状について	立山観光の現状をとらえることで、町民の方々に現状把握をしてもらう。	・アルペンルートに来る外国人観光客への対応方法（町として現在どのような工夫があるのか） ・近年観光客数の推移
未来	町長が考えている観光政策について、	町長と町民が意見交換できる場になる。一体となって今後のまちづくりについて考えるきっかけづくりにする。	・オリジナル日本酒の世界展開計画

また、これとともに越中瀬戸焼の陶芸体験など座学のみにとらわれず、町民の方々が実際に肌で感じながら学ぶことのできる体験型の授業展開も行う。さらに、ゲストスピーカーを招くなどして様々な視点から観光を学ぶことができる。なおその際に、本学の村上雅巳准教授にゲストスピーカーの依頼をしたところ、了承済みである。

講義のスケジュールとしては月に1回の開催を目安にしている。

そして、過去、現在、未来の順に年間の講義を行うことで、現状把握から今後の立山観光の可能性を町民自ら考えていける流れを作りやすいのではないかと考える。

生徒の募集方法としては立山町の広報誌やホームページ、まちなかファームに募集要項と入学希望書を掲示する。希望する方は必要事項を記入の上、入学希望書をポストに投函、またはホームページからも応募する。また、特に年齢制限を設けないため、幅広い年代が参加でき、より多くの人と交流ができることが見込まれる。

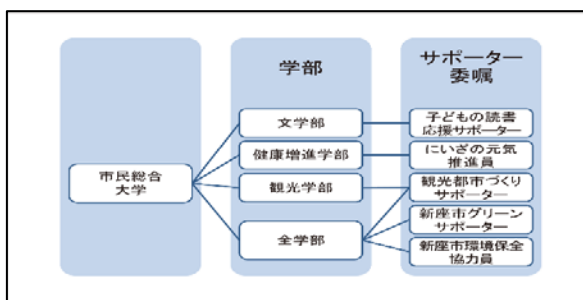
## 《成功例》

平成12年に埼玉県新座市では新座市制30周年を記念して市民総合大学を開校した。市民総合大学とは市民の（自分を高め、地域を高める」を目的に市内3大学「跡見学園女子大学、十文字女子大学、立教大学）の協力を得ながら実際の大学キャンパスの教室を使用して、大学生になった気分を味わいながら学ぶ大学のことだ。

平成28年度には、「観光学部観光都市づくり学科」「文学部子どもの読書応援学科」「健康増進学部健康づくり学科」が開校された。



この大学の大きな特徴の1つは、希望する修了生に対して「サポーター委嘱」を行って、地域で活躍できる人材とし位置づけている点である。具体的な活動は新座市観光都市づくりサポーター・にいざ食育推進リーダー・にいざの元気推進員など様々である。



また大学を修了し、ボランティア活動を行っている方々への調査では「研修会などを通して新しい知識を得ることができる」「生活にリズムができる」「ネットワークの広がりが出て有益と感じている」「市が何を重視しているかがわかり、市民としての自覚が増す」などの意見がみられた。この結果から新座市民総合大学の設置目的がほぼ達成されていることがわかる。



## 4、提案②町民の 町民による 町民のための

### インタービレッジ コンペティション

町民自らが主役になり、立山町について考える。

#### 《提案理由》

一つ目に提案した立山観光大学で全講座を受けその後何か目的がなければ学ぶ意味がない。そこで現在私たちが行っている立山インターカレッジコンペティションのようなものを町民が行うコンペティションを開催し、立山観光大学で学んだ町民がコンペティションに参加し企画を提案することを最終課題とする。学んだ知識を生かせる場、学んだことによって生まれたアイデア、さらなる立山の発展を目指し町民の町民による町民のためのコンペティションを開催してみたらいいのではないかと考える。

#### 《プラン概要》

今までは、インターカレッジコンペティションとして大学生からの案を取り入れていたが、視点を外の人ではなく、内の人つまり町民が立山町について考えることを目的としている。持続可能な活力はまず、町の人々の力が必要である。私たちが提案するインタービレッジコンペティションは、町民自体が立山町を知り、立山町について考え、立山町を変えていこうとする意欲を作り出す土台としている。

そこで、立山観光大学で学んだことを活かし、自分たちが住んでいる町について考えることで町民主体の持続可能なまちづくりにつなげていこうと考える。

最終的には今までにインターカレッジコンペティションに参加したゼミ生にも協力をしていただき、町民が考えるプランを見て、今まで立山町に関わった各大学との繋がりも大切にしていけるのではないかと考える。

## 《メリット・効果》

### ① 町民がやりたいことができる。

→インターカレッジコンペティションの町民版なので、町民が考えるプランの最優秀賞には実証実験をし、実現をする。また、町民の声を市役所側に直接届けることができる。

### ② 立山観光大学で学んだことを活かせる。

→立山観光大学で学んでことの延長として講座ではインプット、コンペティションではアウトプットの間とする。

### ③ 町の問題点を解決できる。

→町民自身が町について考えることで、町民目線での不満や悩みに関してコンペティションを通し、解決することができる。

### ④ 毎年1つ実現するから持続可能になる。

→町民参加型で町の問題を解決することで立山町をより良くし、継続していくことで明るい未来をもたらす。

## 《具体案》

立山観光大学で立山町のことを学んだうえで修了した方々が、成果発表の間として「立山インターカレッジコンペティション」に出場する。しかしこれは、「町民の町民による町民のためのインターカレッジコンペティション」という町民参加型の企画である。これを毎年開催し、立山町が全面協力することで、毎年1つのプランが実現されることになる。こうすることによって、持続可能である。

また、発表を地元住民の前だけでなく、立山町外の人でも聞くことによって新鮮味が増すだろう。ここで今までの「立山インターカレッジコンペティション」を通して、立山町と出場大学にできた絆から、参加したことのある大学のゼミ生が参加し、今度は私たち、外の間が町民の方々が考えた意見に何らかの形で協力できると、なお良いのではないか。

私たち跡見生の役割としては、最終課題であるインターカレッジコンペティションの案の発表の前に地域の方と一緒に考え、アドバイスすることで住民の考えを客観的に見ることができる。町民だけでなく外部の人の意見も取り入れることで、内側の視点をメインとして外の意見も加えることで相乗効果が生まれるだろう。

このような連携をすることによって、立山町民が自分たちのことをもう一度見つめ直し、より良いまちづくりが行われるだろう。そして、立山町以外の外部の人間も協力することで最終的な目標でもある、外からの観光客や移住者も増えていくのではないかと考える。

## 5. おわりに

私たちは持続可能な活力づくりのための第一歩として、まずは町民の意識改革からはじめ、最終的には自分たち自身で立山町をより良いものへ変えていく一連のプランを提案する。

これらのプラン実行により、立山町がより活性化されるとともに、観光客の方が来ても地元について自信をもってアピールすることができるのではないかと考えている。立山の魅力を地域の方に再認識してもらい、それを周りの方に発信することが大切だ。立山町には素晴らしい観光資源が多くある。その中には地域の方々も含まれるだろう。誇れる町にするにはまず自分たちの意識を変えていくことが必要だ。その意識を変え、自分たちで地域全体を作り上げていく形になり、立山町の未来は明るくなっていくだろう。このプランが持続可能な活力になることを期待する。

立山観光大学で町民の意識改革

コンペティションに参加

実証実験

立山町の活性化

持続可能な活力となる

## 参考文献

地域の魅力を引き出すためのコツが分かる事例集－総務省

(<http://www.soumu.go.jp/soutsu/kanko/ai/npo/hokokusho/h200515.pdf>)

新座市民総合大学

(<https://www.city.niiza.lg.jp/uploaded/attachment/20113.pdf>)